＜会員の広場＞

横浜三溪園特別参観と文化講演会への経緯と今後の展望

岐阜聖徳学園大学図書館課長
原三溪･柳津文化の里構想実行委員会副会長
林　憲和

１．はじめに

昨年 12 月 3 日（木）・4 日（金）と岐阜市に所在する原三溪・柳津文化の里構想実行委員会（以後、実行委員会とする）主催による「横浜三溪園特別参観と文化講演会（以後、三溪学習旅行とする）」を岐阜から 65 名、横浜から 55 名の参加者を得て実施した。

内容としては、3 日早朝岐阜を出発。横浜三溪園到着後、裏千家横浜淡交会幹事長の歓迎の茶席に始まり、園内特別参観。夕食は横浜中華街 状現楼にて所功京都産業大学名誉教授の卓話に始まり、横浜原三溪市民研究会長ら東京・横浜の地元関係者の参加も得て交流懇親会。ニューグランドホテルに宿泊。4 日金曜日は、三溪園鶴翔閣にて 10 時から、講演会。講師は、芳賀徹 東大名誉教授で演題は「三溪翁が見いだした琳派の魅力と徳川の平和」。講演後の 12 時から、講師の芳賀先生とともに、岐阜と横浜の各界代表（市民・行政・教育・経済界）による昼食交流会。終了後横浜を出発し岐阜に夜帰着した。

原三溪は、岐阜市柳津町に明治元年の年に生まれ、早稲田の前身東京専門学校で学び、跡見華溪の跡見女子で社会科の教師となり、横浜の原家の養子となり生糸の輸出業を近代的経営手腕で世界の原として財をなし、財界の雄として活躍した。そして近代茶を興した三大茶人として、日本画壇のパトロンにして指導者として、歴史的建造物を５万３千坪の邸内に移築保存し一般に無料開放した。また関東大震災後は横浜の復興に努め現在の横浜の礎を築いた。

（三溪園　臨春閣特別参観へ）

（鶴翔閣での講演会　芳賀徹先生）

本稿は、大学職員が、地域社会の人々のために、大学開放で何が出来るかを模索した結果、我が愛する郷土から出た全国的な財界人にして文化人である原三溪を発掘し、市民学習の学習テーマにして深く学び、市民と共に学ぶ中で自治体を巻き込み、柳津の、岐阜の文化による町おこし、そして、原三溪を共通項にしての横浜・東京との学習・文化交流へと進めてきた経過を報告し、地方の先人の業績を掘り起こして学ぶことが、いかに人々の学習意欲をかき立てる重要な学習素材となり、大学開放による地方創生たりうるかについて考えてもらえればと思う次第である。

２．聖徳学園の同志と共に～高等教育問題研究会（FMICS）から生まれた原三溪顕彰活動

高等教育問題研究会は、FMICS と略称し、設立当初は「まずはじめよう会」と称した。18 歳人口の急減期を見据えて、大学職員が将来的に経営を担える人材になろうと立ち上がった職員中心の勉強会であるが、教員や学校経営者や文部省キャリアやマスコミそして企業人と幅広い層から大学を愛し大学を良くしたいという一点で集える会で昭和 56 年に誕生した。原則東京にて毎月1回の例会と年1回のシンポジウムを実施しており、会員は現在 500 名を数える。

私は運よく創設期から参加した。ここから早稲田の副総長が、立命館の副学長が、高等教育学会長が、大学教育学会長が誕生した。まさに大学の梁山泊の如きで、所属する組織の枠に収まりきらない学ぶことにも大学改革にも貪欲な人々が集まった勉強会であった。

昭和 58 年からは、私が事務局として東海地区において、毎月高等教育問題研究会（FMICS）名古屋の例会を実施し始め、夏にはシンポジウムを岐阜の本学において開催した。その中で第3回岐阜シンポジウムの講師に招いた日本経済新聞本社販売局次長の丹内明良氏に、シンポジウムのプレイベントとしてマーケティング理論のイロハを学ぶ連続10数時間に及ぶマラソン勉強会を実施した。本学を中心に岐阜地区の教職員が 10 名程参加して、マーケティング理論やランチェスターの法則等の企業経営の戦略的・戦術的思考について学ぶ機会となった。

また、FMICS の東京シンポジウムにおいて天城勲文部省顧問の講演を聞き、初めて戦後の大学改革で大学のミッション・使命として「教育・EDUCATION、研究・RESEARCH、奉仕・SERVICE」があることを知った。しかも「奉仕・SERVICE」は戦後から現在まで忘れ果てられるどころか、産学連携することは悪のごとく云われ続けてきた歴史しか知ることがなかった私には大きなお驚きを覚えたものであった。しかし、よくよく考えるに、「奉仕・SERVICE」なら職員である我々が果たせることがあるのではと密かに思いを致したものだった。

そんな折に、『月刊太陽』で原三溪を知るところとなった。そして原三溪縁の岐阜市内にある高級

料亭　水琴亭が紹介されており、わが家の近所であり同級生の家でもあるので、我々にできる「奉仕・SERVICE」としての地域貢献・地域交流の鉱脈ありと可能性を感じたものであった。

御縁もあった。我が学園は、建学の精神が「和を以て貴しと為す」であり、茶道の四規「和敬清寂」に通じ、また浄土真宗の本願寺派の宗門系学園であるため理事に僧侶で茶道愛好家が多かった。短大教員には、土岐市作家協会長で陶芸家にして穴窯の大家　松山祐利教授や大学には、茶道有楽流宗家で織田信長の弟有楽斎の直系子孫である織田長繁教授があった。また教職員で高等教育問題研究会 FMICS の同志であり、かつ教職員組合執行部の仲間たちに茶道愛好家が少なからずいた。そして学園内の高校や大学の茶道部や学生学友会（自治会）リーダーたちも協働した学園全体を巻き込んだ顕彰茶会を夢想した。原三溪の顕彰を通して地元の歴史文化を掘り起こし地域文化の興隆に貢献して域交流を果たす文化活動としてである。

内容としては、三溪意匠の茶室汲月庵と三溪園の臨春閣を写した天楽の間で高校生と大学生による茶席2席と三溪の書画展観席と講演会と点心席（希望者のみで有料）である。地域の方々に顕彰茶会に参加いただき三溪について共に学び、我が学園の建学の精神である「和」を理事・教職員・学生と共に現成していただこうという趣旨のものである。

元々お茶は仏教で仏さまに献茶するところから茶道が生まれ、献花するところから華道が生まれ、献香するところから香道が生まれたといわれるくらいかかわりが深く我が学園には愛好の士が多かった。

幸い、理事会において学園行事として人も経費も負担して実施することが認められるところとなり、原三溪が岐阜に作らせた岐阜でも一二の格式と伝統を誇る水琴亭を貸し切り実施することができた。

しかしながら、当時、未だ 20 代の我々の企画に学園全体が踊らされ、校長退職者が多くを占める管理職もスタッフとして休日出勤を余儀なくされ、茶会や茶道に縁もゆかりもない者が右往左往する状態となり、不協和音を生じ2回で潰えてしまった。

ただその1回目を終えたとき、同志である仲間が「この学園で働いて初めて　やった！という充足感を味わうことが出来た」と云ってくれたことは、私自身も生涯忘れられない喜びであった。

因みに我々の組合のスローガンは私が提案したものであったが、「組織ポテンシャルの向上と自己実現の高揚を」であったと記憶している。

学園行事ではなくなったが、約百万円かかる経費も自分たちで負担して継続させようということになった。そして学生時代から縁のある恩師たちの協力と出演を得て、さらに大きな茶会、顕彰活動へと飛躍していくことになった。

（岐阜市水琴亭天楽の間　学生茶席）

（講演会　雪月花の間　熊倉功夫先生）

講師には、中世文化史の大家で裏千家家元のブレーン・裏千家淡交会顧問・東京の淡交会支部長でもあった芳賀幸四郎（洞然）東京教育大学名誉教授、歌舞伎の団十郎の恩人で家元制度の研究で知られ江戸学の大家である西山松之助（蔵雲）東京教育大学名誉教授、表千家家元を学部・大学院と指導され、関東で流派を越えた茶の湯同好会を細川護貞氏や川端康成氏と主宰された茶人にして倫理学者である数江教一（瓢鮎子）中央大学名誉教授、香道御家流の血脈を今に伝える香道の大家である神保博行（淡蘆）中央大学名誉教授、仏教哲学者で鈴木大拙の松ケ岡文庫長二代目にして花園大学特任教授である古田紹欽先生方であった。

この方々はいずれも実は、岐阜県武儀郡板取村出身の長屋喜一（哲翁）先生の東京高等師範や東京帝大や東京文理大時代の弟子達であり、その縁で皆、禅や茶の道に進まれた方々であった。恩師の故郷岐阜に行くということで奉仕に近い形で二度三度と講師として顕彰茶会に参加いただき、貴重な講演や茶会前後の小旅行をスタッフ共々楽しんでいただいた。

特に神保先生には、毎年 10 名前後の中央大学白香会会員を引き連れ参加され、香席を担当いただいた。おかげで本学に学生サークル聖香会も誕生し、神保先生の指導を受け、スタッフともども香道体験とその奥深い文化を学ぶことが出来た。

他にも同世代では東京工業大学学長で、文化人として有名で人事院人事官も務めた加藤六美先生も二度ほどお越しいただいた。

少し年代が下り、静岡芸術文化大学長の熊倉功夫先生や野村美術館館長の谷晃先生にも講師としてお越しいただいた。

昭和 60 年から平成 14 年まで約 20 年間続けたことになる。

その間に上記のような活動をするうちに三溪園ともご縁が深まり、平成 6 年には、母校中央大学のクラブ五葉会の六五周年を5万3千坪の三溪園の内苑と外苑をフルに使い、関東の茶人方の協力を得て茶席8席・香席・講演会・展観席・点心席という内容で、200 名限定の記念行事を開催した。

（三溪園正門より。講演会は燈明寺本堂、芳賀幸四郎・神保博行・数江教一・熊倉功夫先生方）

また、平成 13 年には、岐阜市の信長祭り協賛行事として、本学と地元正眼短期大学や名古屋大学・中央大学・立命館大学の学生の協力を得て市内数か所で協賛イベントを実施し、水琴亭にて協賛茶会として茶席・講演会そして香席として「三溪香」と「信長香」の組香を神保淡蘆先生に新たに考案していただき披露した。

さらに、毎年横浜から参加していただいた中山氏により、横浜の文芸誌『かながわ風土記』で2回にわたって我々の顕彰茶会を紹介し掲載された。

学園主催から、FMICS 岐阜の同志主催と変遷し、自らが楽しみ遊ばせていただくのなら経費負担は当然という FMICS の「GIVE＆GIVE」の精神で本学のみならず、地元や関東関西の大学の協力を得ながら地域交流・地域貢献を願い原三溪顕彰に取り組んできたのであった。

３．原三溪・柳津文化の里構想実行委員会設立へ

そうした中でいつしか、顕彰茶会でご支援いただいていた古美術商主人がすっかり三溪

信望者となり、地域の建築士や大工などの市民有志が集い顕彰活動を行うようになり、私も参画することとなった。講演会や水琴亭での茶会や水琴亭の紹介事業等を定期的に行った。市民有志による顕彰活動へと広がっていった。

平成12年に本学の総合企画部創設に伴い、広報部門を担当し、公開講座も担当することになった。当 UEJ の研究会に参加し、更に大学開放や地域貢献について学び、それを機に平成 16 年にエクステンションセンターを立ち上げた。その記念行事として記念講演会に元文部科学大臣　遠山敦子氏や香川正弘 UEJ 理事長を招き実施した。

このエクステンションセンターのプログラムの一つに原三溪顕彰講座として、地元柳津町をはじめ岐阜県内外からも参加を得て、日帰りのバスや新幹線による学習旅行を平成 17 年から 4 年に亘り実施した。内容としては、園内特別参観と現地講演（早稲田大学副総長の村上義紀氏）や隣花苑で三溪そばを食するグルメ三溪体験も含めるものである。

平成 19 年には、横浜にて原三溪市民研究会が立ち上がり、三溪の故郷岐阜を訪ねる研修が翌年に開催され、その案内役として神戸町にある善学院への打ち合わせや水琴亭での講演会に参加して横浜のみなさんとも交流する機会を得ることができた。

平成 21 年は、横浜開港 150 年と岐阜市市政 120 年が重なり、これを記念して関東の茶人達の協力を得て三溪園にて顕彰茶会を熊倉功夫　静岡文化芸術大学長の講演と茶席3席・香席・展観席・点心席の内容で 150 名の参加者を得て行った。

（月華殿にて香席）

（燈明寺本堂にて講演会　熊倉功夫先生）

この年は、学生時代からご縁があった横浜禅会主催の講演会が三溪園で開催され、講演を依頼され、円覚寺の釈宗演老師とニューグランド社長で横浜商工会議所会頭 野村洋三氏と原三溪翁の 3 人の交流と横浜や世界でのそれぞれの活躍を語った。

平成 23 年には再び、横浜原三溪市民研究会の岐阜研修の訪問があった。本学を会場にして横浜市長や岐阜市長のメッセージの交換を行い、柳津町の住民リーダーたちが参加し横浜との交流を果たし、その折にも講演をさせていただいた。

この横浜との交流が契機となり、旧柳津町の最後の町長広瀬昇氏の要請を受け、三溪の生家を記念館とすることを目標にその活動方針や諸活動を提案し、骨格となして原三溪・柳津文化の里構想実行委員会が誕生した。

その提案の骨子としては、大体以下の通りである。

【事業基本構想】

原三溪翁の実家旧青木家の茶室と庭園を復興し「原三溪・柳津文化の里」として、三溪翁が明治・大正・昭和と日本文化を復興支援した業績を顕彰するとともにその遺志を受け継ぎ、21 世紀の日本文化の興隆発展に寄与する以下の事業を行う。

［事業プラン１］

旧青木家の土地家屋と茶室と庭園の復興

［事業プラン２］

同地域を「原三溪・柳津文化の里」として三溪翁が明治・大正・昭和と日本文化を復興支援した業績を顕彰する常設展示と柳津の歴史文化を紹介するため、展示室と多目的ホールを含む施設の建築。

［事業プラン３］

横浜三溪園との連携協力のもと、三溪翁縁の記念グッズや書籍や三溪縁の食物の開発販売（三渓そば・草餅・干菓子等々）するとともに柳津の歴史文化を発信する岐阜の新たな観光を創出する。

［事業プラン４］

年一度の「原三溪・柳津文化の里茶会」の実施。

横浜の茶道界との共同開催とし、原三溪顕彰茶会として全国に発信できる茶会とする。

［事業プラン５］

年一度の「原三溪・柳津文化の里まつり」の実施。

柳津の歴史文化を軸に郷土芸能等の文化祭り

［事業プラン６］

年数回の「原三溪・柳津文化の里フォーラム」の実施。

歴史・文化・芸術・経済等の広い分野の講演会。明治・大正・昭和と活躍した三溪翁の活躍分野を軸に、平成の未来に発信する。

［事業プラン７］

年数回の「原三溪・柳津文化の里企画展」の実施

特に第１回は、オープニング展として、岐阜県美術館と横浜美術館との共同開催で、三溪縁の画家・芸

術家・学者等の芸術・学術展として「原三溪・柳津文化の里企画展」大々的に開催する。

［事業プラン８］

「原三溪・柳津文化の里奨励賞」の実施

三溪翁が、かつて日本画壇を支援し育てた業績にならい、有望な若手日本画家を発掘し育てるため「原三溪・柳津文化の里奨励賞」を毎年実施し、日本画壇の発展に寄与する。

４．地域への広がりと新たな展開

平成 18 年の柳津町と岐阜市の市町村合併後、柳津町最後の町長広瀬昇氏を会長に平成 23 年に原三溪・柳津文化の里構想実行委員会として発足し、現在は 80 名の会員を擁している。

会長が柳津町最後の町長　広瀬昇氏であるため人物や歴史文化の顕彰にとどまらず、顕彰活動が「人づくり」、「街づくり」、「街の活性化」、「経済の活性化」、「横浜と岐阜のさらなる元気と活性化」に資することを目標に掲げて活動しているところである。

平成 26 年度の主な活動は、以下の通りである。

１．現地研修会～原三溪翁の郷里を訪ねる～
２．青木富太郎『公私日記帳』読み解き講座
３．三溪こども講座～旧柳津町宮下こども会
４．原三溪顕彰講座（講演会「原三溪と美術」三溪園保勝会副理事長　猿渡紀代子氏）
５．第２回原三溪翁顕彰美術展～地元小学校対象
６．三溪翁顕彰茶会と講演会　茶席と展観席　岐阜公園内華松軒
　　講演会「三溪翁の茶の湯と建築」中村昌生　京都工芸繊維大学名誉教授
７．横浜原三溪市民研究会岐阜研修と交流会
８．グルメプロジェクトやないづふれあいフェスティバル蓮華飯(横平亭協力)企画販売
９．境川中学校（県ふるさと教育週間）・柳津小学校（道徳授業）原三溪講話
10．新春研修会～岐阜県歴史資料館と水琴亭見学会

以上のような活動を実施していく中で、地元財界の重鎮･岐阜市名誉市民三人衆の理解と賛同を得て岐阜市長へ働き掛けていただき原三溪記念館設立を呼び掛けていただく所まで進展した。

しかしながら、その実現にはまだほど遠く、岐阜の市民県民に経済界や教育文化界にも呼びかけ、行政へも働きかけて広く三溪ファンを作るため今回の学習旅行を企画した次第であった。

また、5 度にわたる横浜を訪問しての打ち合わせの中で、この三溪学習旅行を契機に岐阜市・揖斐郡大野町と横浜市において、①市民レベル　②行政レベル　③教育文化界レベル　④経済界レベル　⑤政界レベル　での連携交流を推進するべく取り組むことを目標に掲げることになった。

既に一昨年には、私が橋渡し役になり、またツアーコンダクターとして参加して市民レベルにおいて岐阜市東部の連合自治会5団体の役員 40 名が三溪園見学を機に横浜の自治会連合会と交流研究会を実施した。

今回の三溪学習旅行の主な参加者(下線が 横浜参加者)は、3日夕食会懇親会と4日昼食交流会の参加者（1日のみ参加もあり）を含めると以下の通りである。

（市民レベル）・・・岐阜市民 65 名
原三溪市民研究会顧問、茶道関係　表千家五葉会会長（高山出身）、
原三溪柳津文化の里構想実行委員会長・副会長、裏千家淡交会東海支部長、野村洋三親戚者（大野町在住）
（行政関係）
地元コンベンションビューロー専務理事・常務理事、三溪園園長・副理事長、
岐阜県、岐阜市教委
（教育・文化界）
芳賀徹　東大名誉教授、村上 早稲田大学元副総長、香川 全日本大学開放推進機構理事長・上智大名誉教授、地元大学元常務理事、地元大学付属横浜中高等学校５名、横浜 OB 会支部長・副支部長、地元女子大学茶道部代表・顧問
坂井田 本学名誉教授,所功 京都産業大名誉教授・所京子本学名誉教授
（経済界）
地元信金顧問・元常務・子会社社長、地元銀行関係者、IT 若手企業家、NPO 理事長
岐阜商工会議所関係者、岐阜県中小企業団体関係者
（宗教界）
野村洋三の禅関係者
真言宗僧侶・元アメリカ布教師、野村洋三の禅関係者

また今回は、岐阜県揖斐郡大野町出身の野村洋三の顕彰も兼ねて実施した。野村洋三は、早稲田大学の前身で学び、新渡戸稲造とアメリカ帰りの船中で出会い、新渡戸から「君は経済活動で太平洋の懸け橋となりなさい」と諭され、帰国後に横浜でサムライ商会という

世界的に有名となる古美術店を営んだ。関東大震災後は、三溪（復興委員長）と二人三脚で復興事務局長として尽力し、その後、今回宿泊したニューグランドホテル社長となり横浜商工会議所会頭まで務め、ミスターシェイクハンドとして横浜財界の顔として活躍した。岐阜出身の二人が横浜の復興を成し遂げた原動力となったのである。

（三溪園　臨春閣）

（鶴翔閣にて交流会）

そして、この三溪学習旅行に至る 5 度にわたる各界との事前交渉や打ち合わせと三溪学習旅行両日の交流を通して以下のような連携交流や今後の事業展開の提案がなされた。

① 市民レベル

・原三溪顕彰団体との連携交流事業

・市民の自治会やまちづくり協議会レベルでの連携交流事業

・横浜と岐阜の地元ロータリークラブの連携交流事業

② 行政

・岐阜市と横浜市の連携交流事業

・横浜市教育委員会と岐阜市教育委員会の連携交流事業

・横浜市と岐阜市の福祉・防災団体間の連携交流事業

③ 教育文化界

・三溪翁顕彰学生キャラバン隊・神奈川の大学生との交流

・幼稚園・小学校・中学校・高等学校レベルでの連携交流事業

・横浜と岐阜の信用金庫及び各連携協定大学の連携交流事業

・横浜と岐阜の銀行及び各連携協定大学との連携交流事業

・美術館・博物館や茶道等の芸術文化団体等との芸術分野レベルでの連携交流事業

④ 経済界

・横浜と岐阜の信用金庫（及び各連携協定大学）の連携交流事業

・横浜と岐阜の銀行（及び各連携協定大学）の連携交流事業

・横浜と岐阜の商工会議所の連携交流事業

・横浜と岐阜の経営者協会の連携交流事業

・横浜と岐阜の経済同友会の連携交流事業

・横浜と岐阜の中小企業団体連合会の連携交流事業

・オートモールショッピングセンター（大型商業施設・横浜と柳津）の連携交流事業

・岐阜市（柳ヶ瀬や柳津）商店街と横浜市商店街の連携交流事業（和菓子・料亭も含む）

・横浜と岐阜の JA の連携交流事業

⑤　政界

・市議会・県議会・国会議員レベルでの交流

５．おわりに

まだまだ絵に描いた餅の状態で、今後の展開を期すところであるが、今回の三溪学習旅行において十分な手応えと大いなる可能性を実感することができた。今回の企画を通じて思うことは、「はじめに」でも述べたように、地元の生み出した人物や地元にかかわる歴史的事件などを大学開放で取り上げると、本稿にも見られるように、優れた研究者が学習活動に参画指導してもらえ、狭い地域ぼこりから日本文化の中に位置づけた学習が可能になるということが重要なのである。

今後とも、原三溪という地域の歴史上の人物学習を通して、岐阜と横浜という地方と都市部の相互にわたる市民・行政・教育文化・経済界レベルの多方面な連携交流をして各界の人材が協働する中で、地域の文化や歴史を観光・産業資源として、その魅力の向上に努め、相互の地域活性化に活用する取り組みとして、教育や人材育成に連動させ、さらに地域への愛着心を高めるなどの文化資源を活かした地方創生の実現にむけた取り組みとしたい。

林　憲和　（はやし・のりかず）

1957 年、岐阜県生まれ。中央大学文学部哲学科卒業。桜美林大学大学院大学アドミニストレーションコース修士課程修了。岐阜聖徳学園大学学生課、総合企画課・兼務エクステンションセンター、学長室等を経て、現在、図書館課長。柳下村塾副理事長、高等教育問題研究会名古屋支部事務局、自然農れんげの里理事、岐阜東洋文化振興会代表幹事、全日本大学開放推進機構理事。